

海上自衛隊衛生員から、救命救急センター看護師を経て、国際医療協力局に入職、働きながら公衆衛生学の修士号取得、持続可能な保健人材育成へ貢献したい看護師

みやざき かずき 宮崎 一起

国際医療協力局
運営企画部 保健医療開発課
看護師



★略 歴

- 2001 海上自衛隊入隊 (～2010)
- 2005 自衛隊横須賀病院教育部 衛生員課程卒業
艦艇医務室 (インド洋等派遣), 衛生隊 衛生員
- 2009 神奈川県立衛生看護専門学校 第二看護学科卒業
- 2010 自衛隊退職 フィジー, アメリカ留学
- 2012 国立国際医療研究センター入職 救命救急センター 看護師 (～2016)
- 2014 放送大学教養学部卒業 看護学士
- 2016 国際医療協力局 看護師 (～現在)
- 2019 長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 国際健康開発コース修了 公衆衛生学修士
- 2019 厚生労働省 医政局 看護課 出向
- 2020 JICA ラオス国 持続可能な保健人材開発質保証制度整備プロジェクト 看護行政専門家 (現職)

★過去の主な担当業務:

ミャンマー国 輸血と造血幹細胞移植の安全性向上事業
ミャンマー国 結核診療・検査施設における結核検査情報システム導入研究
東日本大震災時の被災住民の移動と保健医療支援に関する研究
JICA外国人課題別研修 医療関連感染管理指導者養成研修
(国内研修およびリベリア・シエラレオネ国での研修フォローアップ)
疾病対策チーム、医療の質改善チーム

★現在の主な担当業務

保健人材開発に関する研究
保健システムチーム

————宮崎さんが、看護師を目指したきっかけを教えてください。

もともと看護師を目指していたわけではなく、小中高と水泳の選手で、人命救助の仕事に興味があったことから、高校を卒業して、海上自衛隊に入隊しました。医療資格が必要な「メディック」という救助ヘリコプターの搭乗員の仕事に就きたく、2年間の衛生員養成課程(准看護師学校)に進んだのがきっかけでした。卒業後、最初の配属は護衛艦の医務室でした。護衛艦の衛生科員としての仕事は、乗員の健康教育、艦内防疫、傷病者への対応・応急処置・急患搬送などさまざまで、医療・看護について、より広く深く学ぶ必要性を感じると同時に意欲も高まりました。その頃、先のキャリアの展望が、メディックから看護師に変わりました。部内選拔を受験し、看護師進学過程に進み、看護師免許取得後も衛生隊などで勤務しました。

——国際医療協力に興味を持ったのは、看護師になってからですか。

はい。特に艦艇勤務時代に、7ヶ月間のインド洋への派遣任務で視野が広がったことが始まりだと思います。漠然と、将来はグローバルに仕事をしたいという気持ちを抱き、当時、英語を身につけるべく学習に没頭していました。そして、自分の可能性に挑戦したいと決意して、自衛隊を退職後にフィジーとアメリカに留学し、帰国後、国際医療協力局のあるNCGMに入職しました。NCGMセンター病院に入職後は、国際医療協力局が主催している、各種講座や研修への参加を通して「将来は国際医療協力を本気でやっていきたい」という目標ができました。

——宮崎さんにとって、海上自衛隊での経験はどのように生きていますか。

9年間在職して、まず自衛官としての躰や社会人としての常識、普通では経験できないこと、たとえば艦艇勤務、海外派遣なども経験して、壁にぶつかる様なこともありました。本当に多くのことを学び、人間として成長させてもらいました。国際医療協力にも通じることは、環境に適応する能力やコミュニケーション力、物怖じしない度胸だと思います。特にコミュニケーション力については、艦艇衛生員時代に、当時の上司からたくさんのことを学びました。艦艇医務室勤務では、200人程の乗員全ての顔と名前を一致させて、健康状態を把握し、何よりも信頼関係を築けていなければ良い仕事はできません。艦艇というコミュニティの中で、一乗員として認められなければ、乗員は医務室に受診に来ません。当時若造だった自分が、屈強の船乗りたちに対して健康教育などできるわけがなく、いろいろと苦労した思い出があります。信頼関係を築くために、まずは自分がオープンになって、とにかくフットワーク軽く行動し、勇気を持って相手と現場を知ることから始めました。その経験は、開発途上国で仕事をする際に、まずは相手の文化や習慣を把握し、関係性を築くよう努めることにとても通じていると思います。



今も洋上で活躍している海上自衛隊衛生の同期と

——自衛隊を退職してから、海外留学をしていますね。

まずフィジーで半年間ホームステイをして、語学学校で一般英語とビジネス英語クラスをとっていました。憧れていた南国生活でもあり、小旅行やサーフィンなど楽しみましたが、安定した職を辞めて決意をして留学していたので、勉強は妥協しませんでした。フィジーの人はホスピタリティに溢れていました。私が近所を散歩していると笑顔で声をかけ、自宅に招き、お茶や食事を振る舞ってくれることもよくありました。その雰囲気がとても好きでしたし、異文化理解に繋がる経験でした。その後、アメリカに約一年留学しました。アメリカの看護師資格取得を目標として、医療英語とNCLEX-RNという国家試験対策クラスをとり、病院でボランティア活動もやりました。アメリカ生活では、より一層度胸と行動力が身についたと思います。留学中に東日本大震災が起こり、将来のキャリアを改めて考えました。自分はこのまま勉強を続けてアメリカで働きたいのか、グローバルに人の役に立つ仕事がしたいのか自問自答し、後者の気持ちが強く、将来の国際医療協力のキャリアを見据えつつ、まずは病院の臨床経験を積もうと帰国し、NCGMの採用試験を受け入職しました。



とても気さくなフィジーの人たちと

——病院での看護師として勤務した後に、国際医療協力局に入職したのですね。

はい。NCGM内での異動です。臨床では、救命救急センター看護師として4年間勤務しました。救急外来での超急性期の対応から病棟での集中治療、そして回復期までの様々な疾患の患者さんの看護を経験しました。1年目は臨床の仕事に慣れることで余裕はなかったのですが、2年目から、国際医療協力局が主催する国際保健基礎講座を、勤務を調整して毎回受講し、3年目に国際医療協力局の実務体験研修、4年目にはベトナムでの海外研修に参加する機会を頂きました。それらの研修を通して「自分は将来、国際医療協力の仕事がしたい」と、決意を新たにしました。入職4年目の幹部任用試験に合格した時期に、国際医療協力局への異動の話の話を頂きました。正直、国際保健の知識や経験も不十分で、時期尚早ではないかとも思いましたが、これまでの経験がより活かせるフィールドだと思っていましたし、このチャンスを生かそうと、二つ返事で異動を受けました。協力局に入職後は、シニアの局員の先輩に、色々な経験を積む機会を頂き、少しずつ仕事に慣れていきました。入職翌年から、国際保健、公衆衛生の知識とスキルを学ぶべく、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科のNCGMサテライトに働きながら在学し、2年間で修士課程を修了しました。



救命救急センターの新人教育リーダーの務めを終えて
(最前列の左から二人目が宮崎看護師)

結婚は、いつだったのですか？

NCGMに入職して4年目の2015年です。国際協力の仕事を目標にすると、いろいろな経験やスキルが必要で、私もそれを身に付けるべく、休日などは何かしら勉強会などに参加して、忙しく過ごしていました。もう少し自分に自信をつけてから、落ち着いてから、などと思っていたこともありましたが、結局やりたいことは盛りだくさんで、落ち着くことはないと感じました。NCGMに入職した頃から付き合っていた同郷の妻は、当時から、私のそのような行動を理解してサポートしてくれていたもので、これからのキャリアも一緒に歩んでいきたいと思い、プロポーズしました。今現在、コロナの影響もあり、ラオスでの長期派遣は単身赴任をしていて、寂しさはもちろんありますが、妻と2歳の息子の存在に本当に支えられています。

宮崎さんの今後の展望、いま抱いている夢は、なんですか。

明確には描けていませんが、人の役に立ちたい、という私の原点の気持ちは変わらないので、例えば10年後には、リーダーシップを発揮して、国外でも国内でも、人々の健康と安心した生活に貢献できるような仕事をしていきたいですね。今現在は、まずは従事しているラオス国の保健人材の免許登録制度を支援するプロジェクトで、しっかりと成果を出したいと思います。

私は主に、看護師国家試験の創設と実施の部分で、保健省の方々と日々議論を重ね、質の向上と、システムを最適化するために支援をしています。2021年1月に、ラオスで初の看護師国家試験が実施され、期待していた結果に終わり、カウンターパートと喜びを分かち合った場面は、嬉しかったですね。プロジェクトを通じて、特に政策、プロジェクトマネジメント、そして専門性について、より知識とスキルの引き出しを増やしたいと実感しています。将来は、それら引き出しを自信と共に駆使して、一緒に仕事をする人と喜びを分かちあっていたいですね。



ラオスの看護師国家試験委員会にて (前列左3番目)

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人に一言お願いします。

国際医療協力を仕事にするには、高い語学力の上に、知識とスキル、経験が求められるので、ハードルが高い様に感じ、想いが強い人ほど焦りや迷いを抱えるかもしれません。私は決してまっすぐなキャリアではないので、お伝えできるとすれば、焦らずに、今の経験は今後につながる伏線として客観視すると、モチベーションが継続するのではないかと思います。私の場合は、経験を通して、自分に足りない部分や関心を客観視して、並行して大学や大学院等で学びました。大変でしたが「Practice makes progress」をモットーに、目標に向かっていくプロセスを楽しみつつ、継続してきた気がします。また、知力もさることながら、やっぱり「やりきる体力」が大切ではないかと、特に私のようなタイプにはですね（笑）。

国際医療協力を行う組織には、国際機関、国際医療協力局のようなODAを基に活動する省庁等、より現場に近いNGO等、また大学や企業等、様々ですが、それぞれになすべき役割があり、「世の中の健康に関する課題解決」という目標は同じです。ご自身の専門性や関心を客観視して、国際医療協力を選択肢とされると良いかと思います。そして、どうぞご自身の人生設計も大切にしてください。少しでも皆様のご参考になれば幸いです。



ミャンマーの看護師と輸血の安全な投与について



ミャンマーの血液センター
視察時に献血



シエラレオネ、リベリアの病院で院内感染の研修フォローアップ



ありがとうございました。

～タイムリーな報告書作成は財産～

「報告書は業務終了時点で完成していて先方に提示すべきもの」。この先輩局員の教えの大切さを実感しています。イベント開催報告、出張報告、月報、四半期報告など、提出が決められているものやそうでないものも含め、その時の作成労力は勿論ありますが、結局は後々のプレゼンやまとまった資料作成時に、とても役立つ財産になりますよね。新人の頃は、先輩局員に赤字いっぱいの手直しをして頂いていましたが、そのおかげで文章作成能力は向上しました。書く力を養って、フィールドの知見をテクニカルレポートや研究論文として発出することは、社会に貢献しますので、書いて、発信しよう！と自分に言い聞かせています。（2021年5月）

